

愛と死

武者小路実篤





死 と 愛

定価は帯またはカバー
に表示してあります。

新潮文庫 草 57 C

昭和二十七年九月三十日 発行
昭和四十二年十一月五日 四十四刷改版
昭和四十六年六月三十日 五十刷

著 者 武者小路実篤

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

愛 と 死

武者小路実篤著

新 潮 社 版

愛

と

死

一

之は二十一年前の話である。しかし自分には忘れられない話である。

自分が野々村を初めて訪ねたのは二十五の時だった。当時のことは今でも忘れない。

その時野々村は三十で、もう小説家として新進というよりも、もっと大家のように僕には思えた。今思うと少し可笑しいが、当時は三十にもなればもう一流の作家になれた時代で、野々村なぞ二十三四で有名になり、三十位の時はもう大家の域に達しかけていた。少くとも野々村のものを前から愛読していた自分にはそう思えた。

だから実際いうと野々村はもっとずっと齡上の男だと思っていた。逢って若いのに驚いたものだ。

野々村を僕が訪ねることになったのは、当時、僕はかく小説、かく小説悪口をいわれていたが、不思議に野々村はいつも僕のことを褒めてくれた。それで僕は最初の単行本を野々村に敬意を示して寄贈したら、随分厚意を持った批評をもらい、その上暇の時遊びに来ないかと書いてあった。それで自分は喜んで、同時にいく分恐る恐る訪問したのだった。

逢えば気楽な男だった。今でも僕は野々村のことは野々村さんと言っているが、気持の上では当時からすっかり友達のような気になり、平気で生意気なことも言える仲になった。この位気の

おけない何でもわかってもらえる友達には滅多に会えるものでないと僕は喜んでいる。

二

野々村もへんに僕を認めてくれた。買いかぶっているという言葉はつかいたくないが、他の人達はそう思っているだろうと思う程、僕を認め、他の人が欠点だと思ふ処まで、僕の長所だと認めてくれた。

ここでは野々村のことを書くのが目的ではないが、野々村が僕に厚意を持ちすぎていることが、話の起る一つの原因であるから、その点を強調しておくので、僕が有望な人間だったということを主張しようとは思わない。又強くならざるを得ない。無責任な他人のいうことを一々気にしていたら、人間は落ちついて生きてはゆけない。

自分をいつわって生きてゆくのは、世間や他人を信用していない。

三

野々村は不思議な男あまのじやうというか、天探女あまのじやうというか、他人の賞めほめないものを感じしすぎる処があるかも知れない。ともかく僕は野々村が好きになって時々出かけたのだ。

野々村もいつも喜んで逢ってくれた。

野々村の処へ或る日ゆくと、五六人の女学生が庭で遊んでいた。別に気にもしていなかったが、あまりにさわぎがひどいので、一寸ちよつとその方を見ると、二人の女が逆立ちの競争をしているのだ。

一人の方が勝って皆から拍手をうけていた。

「しょうがない奴だよ」と野々村は言った。

何のことを言っているか僕にはその時わからなかった。

だが元気な女もいるものだと思った。

四

或る日野々村の処へゆくと門の処で、背のすらっとした快活な、しかしいかにも未だ^{つぼみ}蕾だとしか思えない十七八の女の子に逢った。

僕を見ると丁寧にお辞儀した。何処か野々村と顔が似ているので、僕も野々村の妹だと気がついて丁寧にお辞儀した。娘は馳^かけだすようにして外へとんでいった。之が野々村の妹で、この前逆立ちに勝った女だということはあとで知った。僕はその後野々村の妹に時々あったわけだが、記憶に一番よくのこっているのはその二度である。

しかしそれから二三年別に野々村の妹の存在を認めていなかった。野々村の妹は美しいと誰かが言っているのを聞いたこともあるが、それは僕には別に問題にはならなかった。

僕も美しいと思ったことはあるが、しかし僕とは関係のなさすぎることだと思ったから別に注意をしなかった。又滅多に逢うこともなかったし、あまりに若くもあり、問題になりもしなかったし、尊敬する友達の妹をそういう目で見たいとも思わなかった。

野々村はある時、「僕の妹は君のものを愛読している」と言ったことがあったが、僕はそれを

無頓着に聞き流すことにしていた。

一二年の間に、齡としと言うものは不思議な働きをするもので、野々村の妹もすっかり女らしく美しくなり、或る日往来で逢った時は、似てはいるが、他人だと思った。野々村の妹がこんなに美しかったはずがないと思ったのである。僕は黙ってゆきすぎようとしたら、その女があわててお辞儀したので、僕は自分にしたのではないと思い、うしろを見たが、自分より他に人がいないので、やはり野々村の妹だと思ってあわててお辞儀したが、その時はゆきすぎたあとで、野々村の妹はそれを知らなかったろうと思った。残念にも思い、わるかったとも思った。

それから二た月程たった時、野々村の妹が三四人の友達と銀座を歩いているのを見たが、僕はお辞儀しようと用意していたが、野々村の妹は気がつかない顔をしてゆきすぎた。

自分は嫌われているなという感じを受けた。

「勝手にしろ」

美しく思え、お辞儀してもらいたかった反動でそんなことを感じた。もうお辞儀なんかしてやるものか。そんな子供らしい感じを持った。

しかしその時は本当に気がつかなかったのだとあとで聞いた。それは本当らしく、その後又一二箇月たって野々村の家のそばで逢った時、野々村の妹は丁寧にお辞儀した。

僕はそれですっかり機嫌をなおしたらしく、

「お兄さんはおうちですか」と聞いた。

「ええ、うちにおります」

二人はそのまま別れたが、僕はいいい気持になったのは事実だ。

しかしそれからずっと逢わなかった。別に逢いたいとも思わなかった。かくて野々村の第三十三回目の誕生日が来た。それは二月二十五日で僕にはその日は忘れられない日になった。

五

野々村の誕生日には野々村を中心として集っている若い文士達が野々村の処に集って、いろいろかくし芸なぞして愉快にくらすのが例になっていた。僕は野々村の処に集る連中にあまり好きでない人がいるので、ゆかないようにしていたが、その日は何ということなしに行く気になった。

僕が行った時はもう五六人が集り、愉快に話をしていた。僕もそのなかに入り、気の合った連中と話をしていた。

その内に皆集ったというので、十五畳の、いつも集合につかう広間の設けの席についた。両側に向いあって坐った。野々村の妹も、末席にひかえて居た、他に女の弟子が二人許り来ていた。簡単なサンドイッチや、すしなどが出てい、又菓子や果物が出してあった。酒も出た、僕は酒がのめないので食う方を専門にした。その内余興が始まった。段々順にやることになり、僕の処に順番が廻って来そうになった。僕はそれには閉口だが、断ればいいと思って度胸をすえていた。ところが皆芸人で誰一人断るものがなかった。そして遂に僕の処に来た。

僕は何にも出来ないから許してくれと言ったが、皆は承知しなかった。僕は真赤な顔して、閉

口した。何かやれたらやりたいと思ったのだが、いくら考えてもやれるものはなかった。

すると誰かが「豚の泣き声でもするといい」と言った。皆笑った。

殊に前から僕に厚意をもっていない四五人の仲間は、僕が弱れば弱るだけなお責めよせてくる。

「皆の前をはって歩くだけでもいいじゃないか。出来ないというわけはない」

「許してやれよ」と野々村が言った。

「だめです——だめです。そういう先例が出来るとあとのためによくありません」

僕はますます閉口した。額から汗が出て来た。

「早くやれよ」

「もったいをつけずに」

僕は益々出来なくなった。この時、野々村の妹が言った。

「私がかわりをするから許して上げなさい」

皆、思わぬ処に援兵が出たのに驚いた。

「私じゃいけません？」

「あなたではよすぎますよ」

「よすぎるならいいでしょ」

「逆立ち」と誰か言った。皆笑った。

野々村の妹は立ち上ったかと思うと、皆の前に走って来て、実に立派に宙がえりをうった。その意外と鮮やかさには皆おどろいて、大拍手喝采^{かつさい}だった。僕は一時に溜飲^{りゅういん}がさがった思いで泣き

たい程、嬉しく思った。

野々村はおどろいて言った。

「おてんば、いつそんなものをならったのだ」
皆笑った。

「いっただか知らないわよ」とわざと乱暴に言った、その表情を僕はたまらなく可愛く思った。
皆笑った。

「それだけ出来れば飯が食える」

「まさか」と野々村の妹は兄を睨にらんだ。

皆笑った。それで白けかけた座が一時に又快活になり皆元気になった。その内に野々村の妹の番が来た。誰かが

「もう一遍宙がえり」と言ったが、野々村の妹は今度はすまして歌をうたった。それも仲々見事の出来で、皆御世辞でなく感心してしまった。

僕はそれ以来、野々村の妹のことが忘れられなくなった。そして野々村が「夏ちゃん」と妹を呼んでいるのを聞いて夏子だという名をおぼえた。

六

それから十日ばかりたったある日、僕は野々村の処へ行こうと思って出かけると、途中でぼったりおあつらえむきに夏子に出あった。二人はなれなれしくお辞儀した。

自分は野々村の誕生日以後この時初めて夏子に逢えたのだ。

「先日はどうもありがとうございました」

「本当に御迷惑でしたね」

「僕はあるなに閉口したことはなかったのです」

「私もはらはらしましたわ。その内とうとう義憤を感じてついあんな出すぎたことをいたしましたし、あとで先生が怒っていらっしやりはしないかと気になりましたわ」

僕は初めて夏子と話をして嬉しかった。しかし先生といわれたのには驚いた。しかしまだよく知っているわけでもないの、それに抗議を言うわけにもゆかなかった。

「怒るどころですか。本当に助かって、あんなに痛快に思ったことはありませんでした」

「それをうかがって私安心しましたわ」

「あなたの宙がえりのうまいのには驚きましたよ。あれだけうまくなるのには随分修業したでしょう」

「ええ。私の同窓に輕業かるわざを見て来た人があって宙がえりの話をしておどろいていたのを聞いている内、そんなこと私にだって出来るわ、と言ってしまったのです。するとその友達がやって見ろと言うのでしょ。私はわざとぐずぐずしていました。すると出来ないと思っただけなんです。私はお転婆ででんぐり返しがすきで子供の時よくやっていたのです。その或る時偶然勢いがよすぎて宙がえりをしてしまったのです。そして母に自慢してやって見て、さんざん怒られたことがございます。しまいには母は泣いて、もうしないと誓いなさいと言うのです。首を折ったらどうす

と言うのです。それで私はその時までしなかったのですが、その時つい母への誓いをやぶってやって見せたのです。皆すっかり驚いて、はやすもので、得意になってそれからたのまれるとやってみせるうちにうまくなってしまったのです。あの日もあとで母から随分叱られたのですが、兄が味方してくれたので母もとうとう仕方がない子だねとゆるして下さったので、私はやっと安心しました」

夏子はそう言って笑った。

野々村の家は思ったより近かった。

七

その後、僕は芝居を見に行った時、夏子は兄や、その他二三人の男の友達と見に来て、相変らず快活にしゃべっているのが、遠くから見えた。

自分はそれを無関心で見ているように思ったが、無関心でいられなくなっていた。いつのまにか僕は夏子の事を想うようになっていたらしい。しかし自分の許嫁いざなけでもなく、自分の方で少し気があるだけで、夏子の方では何とも思っていないことはたしかだったし、僕は女に好かれたい自信があったから、別に気にもしていなかったし、夏子に近づこうとも思わなかった。

まだ自分には結婚して一家をもつだけの自信もなかった。自分は仕事本位の生活をしていた。夏子が感心しないではいられないものを書くという内心の野心はもっていたが、それはただ一種の征服慾にすぎなかった。若い時の自分は征服慾が何よりも強かったと言いたい位で、何か不

平があったり、不快があったりすると、自分の仕事でそれを征服したいと思った。いい仕事をする事、それだけが自分に許されている事だと思った。しかし実は之が一番難かしい仕事なのだが、若い時はそんなことは考えなかった。

見るもの聞くもの癢しやくの種であり、征服される為ための存在のように思えた。自分より偉い人間がこの世に居ることに嫉妬しつとを感じた。それに成長慾が強かった。夏子も自分の仕事をさす力のある存在として認めたが、それ以外のものとして認めることを恥じた。それは柄にあわない、手のとどかないものをほしがる、虫のいい人間に思えた。

僕は野々村をさえ征服することを欲した。自分の頭の上に枝を出している樹木は、生長する樹にとつてははらいのけられなければならない。僕は、誰も自分の頭の上に枝を出すのが許せなかった。そういう態度が何処かにあらわれた。

野々村は寛大な男だから、それも面白い、俺は喜んで負けるよというような顔をしている、それが僕にはなお腹が立つ時もあった。野々村は方々の雑誌に原稿をたのまれ、従って金が入るようになったので生活も贅沢ぜいたくになり、従っていくらか乱作をするようになった。

「馬鹿な奴だ」

僕は内心そうも思った。しかし読めばやはり何処か感心しなければならなかったし、自分には書けない美しさがあった。ゆったりしていた。大きい処があった。

僕のはそれに比べると息苦しかった。

「まだだめだ」そう反省しないわけにはゆかなかった。

しかし自分は自分の頭を押えつけない、自分をよりよく生かしてくれる大家は尊敬した。殊に外国の作家には安心して感心した。しかしそういう大家にも征服慾を感じないというわけにはゆかなかった。日本からすぐれた作家が出るのは今だ。なぞと僕は書いていたが、それはとりもなおさず、待たれている作家は自分であるということを自覚したかった。年齢をいくらかとった今、それを考えると、可愛いというよりは、憎らしい若者だったように思われる。それも過ぎた話ではあるが。

八

野々村がある時こんな随筆をかいた。

「自信の強いことはいいいことだが、他人の長所を認めないことで自信を無理につくろうとするのは醜い。他人の長所は何処までも認め、又他人を何処までも成長させて、他人の価値を十分認めての上の自信は美しい。しかし本当の自信が持てないものは、とかく他人の長所を見ずに短所を見出してはかなき優越感をたのしむ」

僕はそれを見た時、顔が赤くなった。自分にあてつけられたような気がしたから。其処で僕は腹をたててこんな出たらめを書いた。

「山は高きをもって貴からず、木は生長力で価値のきまるものではない。之は本当だ。しかし生長のとまった木は生長力の強い木を見て、反省力が弱いので高くなれると思っている。高いから価値はあるとは言えないが、高い山は低い山を見れば低く思うのはやむを得ない」